〈研究ノート〉

環境教育と芸術に関する基礎的研究

大学院デザイン専攻　**若　林　清　子**

目　次

はじめに
1　持続可能な社会を目指す試みの限界
　1－1　実生活での試み
　1－2　企業の実践
2　持続可能な社会を消費者が目指せない理由
　2－1　経済的な理由
　2－2　情報の偏り
　2－3　現状の中での打開策
3　環境教育の現状
　3－1　義務教育機関の試みと展望
　3－2　知識としての環境教育の限界
　3－3　原風景の喪失と環境教育の問題点
4　環境教育における芸術の効能とその限界
　4－1　環境教育における芸術の利用
　4－2　芸術が生活パターンに転換をもたらす可能性
5　芸術を通しての環境教育の実情
　5－1　映画
　5－2　学校教育の中の美術
　5－3　園芸
6　これからの課題

はじめに

「持続可能な社会」について言われはじめて久しい。環境破壊が人類の存続そのものに強い影響を与えているとの危機感から、既に半世紀近くも前から、国際自然保護連合(1948年)、日本自然保護協会（1951年）を始め、様々な機関が世界に誕生してきた。ちなみに化学薬品が自然環境におよぼす決定的要因として影響を論じたレイチェル・ルイズ・カーソンの『SILENT SPRING（沈黙の春)』がアメリカで出版されたのが1962年、また米連邦環境教育法が成立したのが1972年である。その他多くの環境問題や環境教育への取り組みは、いくつかの重要な出来事を節目に設けながら、先進国を中心に着実に世界に定着しつつある。

持続可能な社会を作るために、現在も様々な環境教育が行われている。しかし、環境問題に関係する多くの活動が世界規模でなされているのにも関わらず、一般の人々の実生活の中で、その成果が目に見えるレベルで我々の精神にまで定着してきているとは言い難い。一つの要因は、環境問題が、日々の営みの中で明確に実利に還元される類いのものでないという認識が今だ大勢を占めているということにあるだろう。また別の要因として、環境教育が、知的なレベルにとどまって、感情や感性のレベルにまで浸透していないことがあげられるのはないであろうか。ここで筆者は、環境問題と芸術の関連と可能性について論じるのであるが、芸術は、環境教育を感情や感性のレベル、すなわち、直接に感覚に訴え、五感を通じて問題を受け止めさせ、個人の行動様式に変えていくことを可能にするひとつの手段となりうるのではないかと考えている。

まず、知的な環境教育の限界を、例にあげて考え、その限界がどこにあるのかを述べるとともに、感情や感性のレベルにまで及ぶ環境教育の在り方や必要性について述べたい。そして、芸術を環境教育に取り挙げることの意義を考

平成17年4月15日受理

えたい。また、その実践的事例をあげて、さらに今後乗り越えるべき課題について、考えていきたい。

1　持続可能な社会を目指す試みの限界

1－1　実生活での試み

戦後、日本人は飛躍的な経済発展を遂げ、物質的に恵まれた豊かな生活を実現させてきた。そうした中で、長年の大量生産・大量消費の結果として、元来豊かで多様性に富む自然環境が知らず知らずのうちに破壊されてきた。近年になってようやく、環境問題が極めて身近な問題として取り上げられるようになり、持続可能な社会を目指して、いろいろな試みが行われるようになった。現在では、多くの教育プログラムが実行されるようになっている。しかしながら、実生活をみたときには、なかなかこれらの試みが浸透しているとは言い難い。

例えば、買い物をするとき、環境への負荷を考えて、買い物をすることはあるだろうか。税金の優遇のあるエコカーへの買い替えのように、環境を考えた方が家計の上でもメリットのある場合は、かなりの割合の人が、環境への負荷を考えた買い物をするであろう。しかし、何のメリットも無い場合、わざわざ高くても環境に良い物を買うことは難しい。消費者は、安いものを買い求めることの方が当たり前である。むしろ、自動車会社が植物由来のプラスチック製品を使う研究をしていたり、コピー機の会社がインクの容器の自主回収をしていたりと、消費者よりも、企業の方が熱心なことも多々見受けられる。

1－2　企業の実践

企業、特に大手企業を中心に、経営戦略として、環境問題に積極的に取り組み、それを公開することが通例となっている。

いくつかの要因が考えられるが、一つには消費者に対するイメージ戦略として「環境にやさしい」取り組みは重要な要素となっていることがあげられる。同じ品質と価格の製品ならば、より環境にやさしいものの方が、プラスのイメージで消費者に受け入れられる。マイナスイメージを持たれることは、大きな損失である。現在では、ＩＳＯ（国際標準化機構）の規格に見られるように、環境問題への取り組みが客観的な指標によって判断されるようになっており、企業イメージを大きく左右するようになってきた。

次に、長期的にみた場合のコストの問題があげられる。資源を適正に循環させていくことはかなりの設備投資や経費を派生する場合もあるが、将来予測される規制のリスクを考えるとやむを得ない。また、国際的な企業として生き残っていくためには、規制によって輸出できない地域や国があることはたいへん損失である。将来の訴訟につながることも避けたい。また、石油などの資源自体が有限であり、産出国の利害によって左右されることは、今や明確である。現在では、環境問題に対して必要とされる視点は、地域規模の俯瞰的なものであるのみならず、極めて身近な、まさに生活の足元における微視的なものであり、何段階ものスケールの違う見方を身につけなければならない。現在重要とされるもうひとつの見方は、消費者は被害者であり且つ加害者であるという考え方である。

企業や行政は、そういった全体に目配りをきかせ、社会システム上の教育機関としての機能も要請されるようになってきている。そこにあるのは、企業が自社の利益のみを追求することは困難であり、企業イメージからしても環境に対する責任を回避しようとすることは、戦略上ありえない状況である。たとえ企業の体質の根底には利益最優先の考えがあるにしろ、今や一定の倫理観とそれを全うする社会的使命感を持って活動することが不可欠になってきているというわけである。

2　持続可能な社会を消費者が目指せない理由

2－1　経済的な理由

我々は過去に深刻な公害問題を経験し、未だに解決されない問題を山積みしている。歴史上の問題は忘却される間もなくメディアによって繰り返し流され、併せて世界的な取り組みの渦中にあって企業は環境問題に取り組むことを余儀なくされている。しかし、そういった背景があっても、一般の消費者が環境に配慮した消費を心掛けているとは言い難いように見える。ただし、消費者が環境に関心がないかというとそうでもないようなのである。知っているが、優先順位が低いのである。京都議定書にアメリカが加わらない理由と同様に、今の生活や経済を維持し、効率的でかつ快適で楽な生活を送ることのほうが、より高い優先順位にあるからである。「衣食足りて礼節を知る。」というが、なかなか環境問題にまで手が回らないのが現状であろう。知識の面から言えば、学校の総合学習や社会科の教科書の中で、環境問題はかなり早い時点から取り上げられているから、小さな子供でも知っているはずである。

では、なぜ、環境に配慮した持続可能な社会を目指す動きが、大きくならないのであろうか。

第一の原因は、環境に優しいものは、一般的に高くてしかも不便だからである。環境よりも経済性を重視するほうが、安くて快適な製品を製造することができる。かつて『買ってはいけない』というレポートが出版され話題を集めたが、洗剤や薬等、我々が日常手にする機会の多いヒット商品の人体への悪しき影響を報告したものである。本の売れ筋をねらった幾分誇張した表現もあるが、経済性や実用性と健康への影響の間に横たわる消費者心理の矛盾がこの本が購買数を伸ばした背景となっている。

例えば、天然繊維と化学繊維の洋服を比較してみよう。絹や綿・ウールのように天然のものは、石油製品より、環境に対する負荷が少ないが、手間がかかり、値段や生産量が天候や自然条件に左右される。作るのにかかる時間が長く、欲しい機能を付加することが難しい。また、扱いも難

しい。化学繊維は、主に石油から作られるが、研究によって、扱いの楽な、用途に合った、低価格なものが、容易に開発できる。

環境に最も興味のあってしかるべきのアウトドア派の人たちが、化学繊維の衣料品を選ぶのは、欲しい機能を付加した製品がいくらでも開発されるからである。軽くて暖かく、嵩張らない、丈夫な登山用の衣料はほとんどが化学繊維である。

消費者の多くは、認知度の高い企業の生産する商品に対して、人体への影響は既に検証済みといった暗黙の理解をいだきがちである。現実に、一定の期間に消耗していくことが予測され買い換えを前提として購入するものに対して、あえて、少し値段は高いが環境に優しいものを選択し使用したところで、短期的には何の違いも見られないからである。当然、化学繊維を着たところで、どのような違いを環境に与えているかを実感することは、生活の中では難しい。

科学物質過敏症については、このごろよく知られるようになってきたが、これは、一定量以上の化学物質を摂取して始めて発症するものである。発症してみるまで化学物質を体内に取り込んでいるかどうかは、自覚されない。まして、化学物質は目に見えないものであるから、なおさらである。誰も、自分が食べている食品に多くの化学物質が入っていて、これが体内に蓄積していくことを、自覚することは難しい。シックハウスのように、大量の化学物質を鼻から吸い込んで発症するものにいたっては、臭いが化学物質であるという知識を持っている人さえそう多くはいないのが現状である。

2－2　情報の偏り

昨今は、子供の遠足にさえ、水筒の代わりにペットボトルを持たせる家庭が増えている。軽くて、お茶をわざわざ作らなくてもよくて、しかもリサイクルできて、環境にも家庭にもやさしいと思っている人が多い。普段から、自分のうちで麦茶を作らず、ペットボトルを使っている家庭も多い。（筆者の日常の経験を振り返ってもても、訪ねた先で子供にペットボトルのお茶やジュース・清涼飲料を出す家庭が９割を超えているように思う。親にはコーヒーや紅茶・日本茶が振る舞われ、これらの熱い飲み物はほとんどの場合インスタントではないのと対照的である。）また、ペットボトルは飲み物の容器としてだけでなく、幼稚園の工作や小・中学校の理科実験でも使われ、特に幼稚園からは、月に何本も持ってくるように言われたこともある。簡単に加工ができ、同じ型のものが多くあるから、公教育の場で使うのには向いていたのであろう。それ程、多くの人が、日常的にペットボトルを使っているということである。機能性と利便性のなせる技である。

リサイクル率が100%にならない限り、ペットボトルを使うよりも、家庭で麦茶を作ったり水筒を用いたりすることの方が、ゴミを減らし、出来るだけ石油に頼らない生活が実現できるはずである。しかし、専門家はともかく、少なくとも筆者の周辺の親や学校のレベルで考えると、「ペットボトルはリサイクルできるので、環境にはよいものである」と考えられているように思われる。

筆者の住んでいる八王子市や多摩市でも、ペットボトルの回収はペットボトルの普及と同時に始められた。ＰＥＴボトルリサイクル推進協会の統計データを見ると、1997年から開始されたとのデータが載っている。筆者の身の回りでも、だいたい同時期にペットボトルが普及し始めている。これと同時に、幼稚園や学校の工作や実験でもしばしば使われるになり、今では、ほとんどの幼稚園や保育園、小学校、中学校、実験教室などで使われている。これは、工作がしやすく、安全な上に、材料費がかからないからである。カリキュラムによって違うが、幼稚園によっては、毎週のように持っていかなけらばならないところもあった。元々便利なものである上に、学校や園で使うことによって、ペットボトルはますます家庭の中に入り込んできている。園や学校から、持って来いと言われれば、すぐ翌日には持たせなくてはいけないので、普段から使っていないといけないという悪循環も生まれている。また、リサイクル工作という言葉を園や学校で使うことが、心理的な後押しになったことは、想像に難くない。何となくいいことをしているような錯覚に陥るからである。しかし、実際には、リサイクル率は今でさえ、およそ40%なのである。約60%のペットボトルはゴミになり、環境に負荷を与えている。そのうえ、年々ペットボトルの需要は伸びているから、大量の石油がペットボトルの生産のために使われている。

普及し始めた当初から、ペットボトルから洋服が出来ることは、テレビニュースなどを通じて大概の人が知っていたが、割高になるため、なかなか売れなかった。リサイクルをしても、それを買ってくれる人がいなければ、やはりゴミになってしまう。いまでは、帝人などの企業の努力によって、色々な製品が開発され、リサイクルにかかるコストは下がってきているが、それでも仕分けから始まってリサイクル工場に送られるまでには、人件費や輸送費などの目に見えないコストがかかっており、これは地方自治体が税金を使って支払っている。

この種の情報を検索してみると、多くの専門家が、ペットボトルのリサイクル工作では環境への負荷をなくすことは出来ないことを、色々な角度から指摘しているのに驚かされる。主婦として、母親として、生活している限りにおいて、このような言葉を人から聞くことはまずない。今や、ペットボトルは余りにも当たり前のものであり、その存在を議論することは、生活の中ではありえないことなのである。我々は行政のやり方にしたがってゴミの分別を行い、その先のリサイクルについては他に一任した形をとっており、ペットボトルがどこから来てどこに行くのかに対する関心は決して高くない。リサイクルに出したことで、満足してしまっているのである。

リサイクルは完全なものでなく、依然としてかなりの比

率でゴミは最終的にもゴミになるという当たり前の常識は、ほとんどの消費者にとって、ペットボトルがリサイクルできるという産業側の情報発信の前に隠されてしまっている。企業はリサイクルを前面に出すことで、免罪符を手に入れ、それのみを大きく取り上げているようにみえる。そしてさらに、消費者は、その商品の得難い利便性の前に、都合の悪い情報には眼が行かなくなってしまう。

企業は環境問題を打ち出すことで企業イメージをアップしようとするだけではない。自身に都合のよい、間違ってはいないが偏った情報を流すことによって、自らの利益と結び付けようとすることも多いのではないか。およそ企業にとって利益にならない情報は、消費者の耳には届かない。こうして、自身では環境問題に取り組んでいるはずの消費者を、実は環境破壊への加害者にしてしまっているのである。

このような、情報の偏りは、他のいろいろな方面でも指摘できるところのものであるが、これらは、長期的に見ないと結果が出ないものであるがゆえに、気をつけていかなければならない。

2－3　現状の中での打開策

しかし、長期的に見て、環境への負荷の小さい社会を作ることは、今急務となってきている。温暖化による海面上昇に伴い、南太平洋の諸国では国土が水没の危機にある。大気汚染によって多くの人が嘆息に悩まされているし、今や国民病とさえ言われる花粉症も大気汚染との関係が取りざたされている。短期的には、何の変化も無いような環境負荷が、長い目で見ると大きな社会問題を引き起こしているのである。このような、長期的な問題に対して、最も大きな影響力を持つものは、学校教育であろう。いくらメディアの力が大きくても、それは、興味を持った人に偏って情報伝達がなされる上、一過性のもので、持続的に情報を与えることは少ない。しかし、学校教育であれば、関心の度合いの違う人に、持続して、ある程度一律の知識を浸透させることができる。

一方で、持続可能な社会を抽象論ではなく、具体的な事例として日常的に知る手立ては、一般社会にも多く存在する。白書や近年増加している環境本と呼ばれる多くに出版物もこれに貢献している。いずれにせよそういった資料を積極的に手にとる気持ちさえあれば、恐らく我々は環境問題に対するたいへん豊かな客観的データを手中に収めることができる。

『地球環境情報２』（石弘之）によれば、1974年から1996年までの約20年間に約37万平方キロメートルの森林が開発によってアマゾンから消失した。地球温暖化の影響は極地にも影響を与え、南極半島に生息するつがいのペンギンがこの20年間で約４割も減少している。「地球の森が消える」「極地圏の異変」「環境破壊と国家崩壊」といったこの書の目次を追うだけでも、この書が訴えようとしている環境破壊の実情が地球上の生態系にどのように致命的なダメージを与えているかを、想像できよう。

環境省の『レッドデータブック』では、つい20年前にはごく身近な生き物であった多くの種が絶滅危惧種に指定されている。メダカやダルマガエルなどがその例である。このような状況の中で、ビオトープを造ろうという運動が盛んになり、今では多くのビオトープが保育園や幼稚園、学校、公園に作られている。

インターネットを通じても、多くの資料を簡単に手に入れることが出来る。そこには環境専門の検索ガイドさえも存在している。

3　環境教育の現状

3－1　義務教育機関の試みと展望

では、どのような環境教育が行われて、どのような成果をあげているであろうか。例として小学校の社会科を見てみよう。実に多くのページが環境教育のために割かれている。

例えば、東京書籍の教科書を例にあげると、五年生で、「わたしたちの生活と自然保護」と言う12ページに亘る記載のほかに、農業のまとめの章に４ページ、工業についてのページの中に２ページとかなりの割合で、環境に関する記載がある。四年生でも、環境教育には多くの時間を割いている。（東京書籍・大阪書籍・光村図書・日本文教出版では、「ごみのしまつ」と「かんきょうを守るくらし」の２単元、教育出版では「ごみのしまつ」の１単元。）６年生では歴史と公民を習うので環境についての項目はないが、小学校全般の教育課程を見たとき、環境はたいへん重要視されていることがわかる。社会科見学でも、下水処理場やゴミの焼却場など、環境に関する施設を訪れる学校が多い。

また、書店の子供向けの棚を見ると、理科のコーナーでは、環境と実験に関するものが多く、科学読み物が減っている分だけ、目立った存在になっている。ちなみに、Amazonドットコム（2005年３月１日）で、子供の本の中から、理科を検索すると846件、環境では816件、科学では3586件、社会科では2382件の本が載っていた。科学や理科・社会科の中には、学習参考書や図鑑などのシリーズ物が含まれているから、それに比べて環境に関するものが如何に多いかがわかる。これらの本は、総合学習や、学校の教科学習の補強などが主な目的であるから、教科書の発展としても、環境は大きく取り上げられていることがわかる。環境教育は、小学校からかなりの割合を占めている。

これは、中学校や高校の生物の教科書を取ってみても、同様のことが言えよう。20～30年前に比べて、生態系や環境についての記述が増えており、総合学習で、環境を取り上げるところも多いので、かなりの比重を占めている。

今まで見てきたように、環境教育に力を入れているにもかかわらず、環境よりも経済を優先させる社会が変わらないのはなぜなのであろう。

それは、今日なされている多くの環境教育が、知識重視の教育の範囲にとどまり、実践的な生活の範囲にまで及んでいないからではないであろうか。経済が停滞し雇用も安定しない今、多少の負担に耐え、長い目で見て、持続可能な社会を作るために投資をするのは、家計的にもつらく、他を犠牲にしないと実行することは難しい。それを支えるには、環境にやさしいことをしたいと自発的で強い動機が必要となる。

しかし、現実には、テレビコマーシャルを中心に、毎日のように子供たちは企業からの情報を受け取り、欲望を刺激され続けている。テレビコマーシャルは、胸のすくキャッチコピーや美しい映像をあやつり刺激的で多様な情報を持続的に浴びせかけ、視聴者を翻弄する。その内容は玉石混淆であり、多くは企業倫理に支配され教育的配慮にかけた感がある。ましてや子供の心に環境への関心を植え付けるものは極めて断片的にしか存在しない。

3－2　知識としての環境教育の限界

今、環境に興味を持って、環境保護活動等の、環境教育の知識を実践している人たちの話を聞くと、大概の人は、鳥が好きだったからとか、植物が好きだったからとかいうようなことから、活動を始めている。学校で習ったからとか、授業の一環（中学や高校では、ボランティアが、授業の一環に取り入れられたり、進学のときの有利な条件になったりする。）として活動している人たちは、個人の利益レベルを動機とした行動である以上、学習期間が終わってしまえば、それまでである。

また、一般の環境教育のプログラムへの参加を、子供にアレルギーが出たからとか、体を壊して農薬の恐ろしさを知ったからとかという、切実な被害を受けて始めた人も多い。

もちろん、近年多くの大学や大学院などで、環境問題の専門教育を整備するところも増え、そうした中で環境教育の必要性を認識し、社会に出ても問題意識を維持し何らかの活動に参加していく者もいるが、そのような専門に行き着くことも、大概の場合は、元々何らかの興味を持っていた結果である。こういった人々を生み出す教育の裾野は、まだまだ十分な広がりを持っているとは言いがたい。

このように見ていくと、現状の学校教育や啓蒙運動などで、知識だけを入れても、もともと人は自分の日々の生活が物質的に豊かで至便であることを優先しているのであって、なかなか生涯にわたって環境に目をむけていくことはできないということが分かってくる。

性急な言い方が許されるならば、実害を受けるなどの必要に迫られない限り、一般の人たちに環境問題に目を向けさせることは難しいということになる。だからといって環境教育を行うことの不毛を肯定することはできない。学校における環境教育を放棄することは、興味を持つ機会を奪うだけでなく、興味を持っている人に正しい認識を与えることさえ出来なくなるので、これが大切であることには変わりはないし、一定の効果をあげていることは確かである。

3－3　原風景の喪失と環境教育の問題点

では、どのようにすれば、人が日々の生活の中で、環境に興味を向け、持続可能な社会を作っていくことができるのであろうか。

それには、感情や感性のレベルにまで、環境教育の影響が及ばない限り、消費のパターンにも生き方にも、影響を及ぼすことは難しいのではないだろうか。自然に目を向け環境に優しい生活をすることが、気持ちがいいとか「カッコイイ」とかというような、幾分通俗的で表層的な捉え方であっても、日常的な感情の後押しが必要になるのではないであろうか。

それには、既に類型的な多くの教育プログラムが存在しているのであるが、自然の中で楽しい時間を過ごしたり、素晴らしい景色に感動したり、環境に優しいものが体にとっても心地よいと実感することが一番自然な方法であろう。

しかし、都市生活を余儀なくされている家族にとって、日常的に、子供を自然に触れさせることは、たいへん難しい。筆者の小さい頃（昭和30年代から40年代くらいまでの地方都市近郊）は、空き地があり、そこが子供たちの遊び場だった。そこには、そこに生えている雑草を使ってままごとをしたり、虫取りをしたり、溝でドジョウやカエルを取ったりもした。近くには山があり、ワラビやゼンマイくらいの野草はいくらでもあったから、学校の帰り、寄り道をして摘んで帰っておかずにもした。もちろん、空き地にも山にも一人で遊びに行くことも出来たし、友達とも出かけた。生活の中に、身の回りの自然が溶け込んでいた。このような体験を通じて、自然の匂い、色、音などが、私たちの原風景となって、トポフィリア（場所愛）を形成した。

ところが、今はどうであろう。筆者の周り（多摩ニュータウンの中）では、まず小学校低学年の子供が１人で空き地や山に出かけることはない。いろいろな事件が起こっている昨今、子供が安全に子供だけで遊べる空間は少ない。公園にも親がついて行く。山などもってのほかである。たとえ空き地はあっても、柵がしてあって、「危険・立ち入り禁止」の立て札があって、入ることは出来ない。室内でゲームをしたり、野球やサッカーのクラブに入ったりして、子供たちは遊んでいる。直接自然の中で、自然のものを使って遊ぶ機会は、日常生活の中ではたいへん限られている。

これは、何も、ニュータウンだけの問題ではない。繁華街や歓楽街のように明らかに子供に不向きなところだけでなく、郊外の美しい田園風景の中でも事情は同じである。田園地帯においては、過疎化によって子供の数が減り、子供たちだけでの行き来が難しいところもある。子供の数が減ることにより、年長者から年少者へと、昔から伝承されてきた智恵や遊びがなくなりつつあるためでもある。自然の中での遊びにはある程度の経験や智恵が必要であるから、伝承が途絶えると遊びの種類が減り、結果として、子

供たちは外には出て行かなくなるのである。また、美しく見える田園地帯も、よく見れば農薬などの化学物質まみれで、子供の健康のためには適さない場所も多い。そのうえ、田舎といえども、犯罪は起きる。なかなか、自由に安心して遊ぶことは難しいのが現状である。

その上、子供たちの生活は極めて忙しい。学校に塾、お稽古事と、時間刻みのスケジュールに追われて、ぼんやりとしている時間の無い子が多い。学校帰りに道草をすれば、道端には野草が生え、東京の真ん中にも色々な虫や鳥はいるのだが、気づくことは少ない。ここでも、治安の問題がある。道草をすること自体が危険であり、時間どおりに帰宅することが要求される。

それ故に、今も、ネイチャーゲームや自然体験教室などを通じて、郊外や大きな公園などで、子供を中心に楽しく環境に楽しく興味を持ってもらおうとする多くの試みがなされていて、一定の効果を上げていると思われる。しかし、これらの試みは、あくまでイベントであって、日常生活ではない。また、それらのイベントが自分の生活空間の中で開かれることは稀であるから、知らないところへ出かけて行っての体験である。これらの体験を通じて、子供たちが将来どれだけの関心を自然に環境に持つことができるのかは、今後の検証が待たれるところである。個々の人間性の中に自然を呼び戻し、共生社会を意識化し定着させる必要や試みは今後も重要性を増していくに違いないが、一連の経験が原風景のような記憶の種子として形成されたり、郷愁を誘うものになったりと、それぞれのトポフィリアを形成する機縁となって欲しいと思う。単に、ゲームが面白かったで、終わってしまってはならない。

4　環境教育における芸術の効能とその限界

4－1　環境教育における芸術の利用

では、多くの人々にとって、日常生活において自然の中で色々な体験をすることが難しい現在、環境に興味を持ってもらい、持続可能な社会を作るために、何かよい方法はないのであろうか。また、直接的には、環境に何の興味も無くても、環境に負荷のかからない生活をすることを促すことは出来ないだろうか。

ここでは、一つの方法として、芸術の利用を提案したい。

芸術の効能の一つは、芸術作品を通じて、間接的な自然体験をすることができる点である。

絵画や写真を通じて、作者が感動したり或いは作品制作のインスピレーションを得たりした自然環境を視覚的に疑似体験できる。そして、その作品への愛着を通じて、そこに写し取られた自然への興味を持つ。これは、多くの観光客が、画家達によって描かれた土地を訪れることを見れば頷けよう。フランスは言うまでもないが、ゴーギャンのタヒチ、コンスタブルのイギリスの田舎など、例をあげればきりが無い。

山水画や漢詩に描かれている景色を求めて、今や多くの日本人が中国を訪れている。旅行会社のパンフレットを見るならば、「水墨画」・「漢詩」というキーワードで、桂林・杭州・蘇州などの観光地が載っている。今のように容易く中国を訪れることがかなわなかった室町や江戸時代においても、多くの日本人が、絵画や文学を通じて中国の風土や文物を、まるで原風景のように愛し、自国の文化の一部のように受け入れていたことを見れば、間接的な自然体験が芸術を通じて行ない得ることは、自明のことであろう。

現在、このような観光地では、観光客が押し寄せることで産業としての観光が成り立ち、観光を維持するためにその自然環境が守られている現象が起きている。世界遺産がこの例である。また、観光客が訪れることで、改めて自分たちの回りの環境に関心を持ち、その良さを再認識することもある。

また、文学においても同様のことがおこっている。例えば、絵本は、文学と絵画のどちらにも入るが、『ピーターラビット』に描かれた場所は、イギリスでも最も早いナチュラルトラストの一つとなっており、多くのファンが訪れて、絵本の挿し絵そのままの景色や自然を堪能している。同様に『たのしい川辺』や『熊のプーさん』など、何気ない自然を慈しむような絵本がイギリスの子供たちに愛読されつづけている。絵本によって、何気ない風景が特別な意味を持つところとなり、環境を保護することにつながっている。英国人の環境に対する愛着は、このような、小さな子供の頃からの絵本を通したごく自然な環境教育の賜物かもしれない。もちろん大人の本の中にも、風景が特別な意味を持って、読者を魅了し続けているものは多い。『赤毛のアン』のセント・エドワード島は今もアンのファンの人たちの聖地である。『嵐が丘』はヒースの曠野なしには存在しない。

これらの例で見るように、芸術を通じた間接体験によって、環境に興味を持ちその大切さを考えるきっかけとなることがわかる。また、きっかけに留まらず、そこからより深い関心を持ち、知らず知らずのうちに環境について考えることが出来るのである。そして、深い愛着に裏打ちされた環境への興味は、経済性や利便性と同様に、何かを選択する時の大きな原動力となり、それらのものに対抗できるのではないだろうか。

4－2　芸術が生活パターンに転換をもたらす可能性

また、芸術を愛することで、日常の安価なものを大量生産・大量消費する生活パターンから、本当に気に入ったものを長く大切に使う生活パターンに転換できるとは考えられないであろうか。所謂スローライフである。これは、直接的には環境教育と関係がないようにみえるが、単純に芸術作品の生成や流通に視点を置いただけでも、実際的な効果が推察されよう。2004年のノーベル平和賞を受賞したケニアの女性観光保護活動家のワンガリ・マータイさんが、日本の「もったいない」という言葉に感銘を受けたことは

記憶に新しい。物を大切に使うことは、環境問題の解決に大きく寄与するのである。

例えば、素材についてみてみよう。工芸に興味を持つ人は、自然素材、例えば、プラスチックよりも陶磁器や木製品を好むようになる。なぜなら、工芸作品は、ほとんどの場合、自然素材のものだからである。素材自体が、環境への負荷が少ないものであることが多い。

そのうえ、高価な工芸作品を購入した場合、おいそれと買い替える訳にはいかないし、大事に扱わなくてはいけなくなる。消耗品として作られている大量生産のものに比べて、長く使おうという意識が必然的に働き、環境への負荷の小さいものを長い時間使うことになる。結果として、環境に負荷の少ない生活をすることができるのである。

また、別の見方をすれば、工芸作品を買う場合は、流行に流されず、よく吟味して気に入ったものを買うことが多い。気に入ったものを買えば、それを大事にする。大事にすれば愛着がわくから、ますます長く手元に置くようになる。壊れても、修理を重ねて、代々使うものさえ出てくる。結果として、消費のサイクルを延ばすことができるというわけである。

大量生産・大量消費型の生活から離れて、気に入ったものを大事に長く使う生活をすることは、環境への関心を持つことにつながっている。持続可能な社会を作ることは、長い年月に耐えうる生活用品を使うこととよく似ている。

このように、芸術は、環境教育を感覚的な側面からサポートできるものである。しかし、美術にしろ、文学にしろ、音楽にしろ、芸術が環境教育との連携について考えられることは少なかった。環境問題や環境教育が科学的なものであり、データに基づかないものは信用性が無いと長い間考えられてきたからであろう。芸術作品の解説には自然への賛美の言葉が満ちているにも関わらず、芸術を環境教育と絡めて見ようとすることが少な過ぎたように思われる。

5　芸術を通しての環境教育の実情

5－1　映画

そこで、いくつかの芸術を通じての環境教育の実践がなされている例を見てみたい。

恐らく、直接的に、環境に最も関心を持って作られている芸術は、映画ではないだろうか。レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』や、東京ガスが主催している「EARTH　VISION」、フレデリック・ペックのアニメーション『木を植えた人』や『大いなる河の流れ』など、直接的に環境を歌っているものがあり、環境に関心のある人たちの中ではよく知られている。また、『ミクロコスモス』や『WATARIDORI』などのように、昆虫や鳥だけを撮ることで、直接的に言葉では言わないが自然への関心を喚起するものもあり、一応商業ベースに乗っている。しかし、それらのものは、興味のある人により興味を持たせることには大きな効果があるものの、興味の無い人にとっては全く関係の無いものである。

一般向けにヒットした作品の例として最も親しまれている作品は、宮崎駿監督のアニメ『となりのトトロ』であろう。環境を表には出していないが、随所に環境に対する監督の思いがあり、そのやさしさを含めて、特に小さな子供たちまでもひきつけている。また、『天空の城ラピュタ』や『ナウシカ』・『もののけ姫』など宮崎駿監督の作品には、皆、自然に対する監督の思いや思想が知らず知らずのうちに伝わってくるように作られている。そして、そこから、日本におけるナチュラルトラストの草分け的な存在である「トトロのふるさと財団」が作られ、大きな影響を持っている。最も成功した例であろう。

それとは反対に、『ファインディング・ニモ』のように、おそらく環境や自然への関心を持って作られたのであろうと思われるが、生物資源の大量捕獲といった環境破壊につながってしまった例もある。ペットブームを巻き起こしたことによって、乱獲を進める結果になったのである。ストーリーを見れば、これは、人間の身勝手なペットブームやそれを伴う乱獲を戒めるものとなってもよいはずだが、キャラクターのクマノミのかわいさだけが先行してしまった。

環境問題の視点は社会の２面性を暴くことにもつながっていくが、『トトロ』が成功して、『ニモ』が失敗した理由はどこにあるのであろうか。どのようにすれば、『ニモ』のような結果をもたらすことがないように、しかも商業ベースに乗るもので、興味のない人にも環境への関心を喚起できる作品が作ることができるのであろうか。このように、自然を慈しみ生き物を大切にする観点で制作された作品が一般におよぼす影響を考えた場合、環境教育をするはずが逆の結果を招くこともあるということは十分ありうるわけで、実際に起きた状況もふまえながら、関心のない人にも見てもらえ、考える機会を作る配慮の行き届いた作品が出ることを望みたい。

5－2　学校教育の中の美術

ここでは、美術、特に学校教育の中の美術についてみてみよう。

美術自体が映画ほどのインパクトを現在では人にもたらしていないように見える。それは美術館や博物館が、ほとんどの人にとって映画やビデオほど身近なものと感じていないからではないからであろうか。

しかし、小中学校では図工や美術の授業が行われ、学校教育の中では、美術は必ず子供との接点を持っている。もう少し、図工や美術の授業の中で、自然を観察するすべを身につけることができればよいのではないだろうか。それは理科という他教科との連動も意味するが、観察をし、記録し、更に作業を拡張しそれを絵にすることで、観察力や洞察力を養うことが出来、多くの知識を身につけることができるのではないだろうか。知るということは、意識することであるから、関心を寄せるきっかけになる。知識偏重

の教育が横行する現在、理科実験の授業が減らされ、自然と親しむ機会も益々少なくなってきている現代の子供たちに、少しでもその出会いや機会を与えることが、工夫次第ではできるはずである。それには、図工や美術の先生になる人が自然に対する関心を大いに持ってもらい、専門領域を横断的に指向し、教育内容を創造的に準備する意欲的な教育が行えるよう、教員養成を行う大学教育の中でも準備することが大切であろう。現場ではいろいろな困難な状況が待ち構えているのであるが、花だんの園芸植物に対してだけでなく、生態系の中で生きている自然の動植物を美しいと感じさせるような教育をして欲しい。先述したように理科は理科、図工は図工ではなく、各教科が連動していけば、今のカリキュラムでも色々な道はあるのである。

実際に、子供に虫の絵を描かせると、今まで嫌いで触れなかったような子が、その美しさに気がついたり、興味を持ったりする。クモやガのように、人から嫌われるものも、絵で見ると美しいと感じることもある。速水御舟の「炎舞」や、小茂田青樹の「虫魚画巻」等を見て、おそらくグロテスクに感じたり気持ち悪いと思ったりする人は少ないであろう。新しい観点で理科教育に寄与するにちがいないと考えることができれば、図工や美術の時間に、科学的な視点におさまりきれない、単純に美しさというものに焦点を当てた生物の観察画を描く機会を与えることの必要度はさらに高まるに違いない。そして、環境というものに興味を持つ手助けをして欲しいものである。理科の授業が削減された上に自然と親しむ機会の少ない現代の子供たちに、少しでもその自然に触れ、愛着を持ってもらうことが、図工や美術を通して出来るのである。そして、その自然に対する愛着こそが、環境教育の一番大切な入り口となるのである。

5－3　園芸

自然観察の機会は身近な園芸の経験からも得られるが、この園芸を芸術の分類に入れるのかどうか、断定しにくいところである。しかし、作庭とか庭園の設計といったジャンルは、広い意味で芸術の分野として扱われているのであるから、ここでの考察の対象として以下に触れてみたい。

園芸は、最も自然や環境に近いところにある芸術でありながら、今の状況を見る限り、自然破壊に近いところにある。

植物を植えるのであるから、土に親しみ、原風景を作り出し、人に自然を愛する心を育てるはずである。しかし、ＮＨＫの「趣味の園芸」などを見ても、園芸ほど自然に対するやさしさのないものは無いのではないかとさえ思われるときがある。化学肥料を使い、農薬を撒き、生態系にまったく配慮しないで、園芸植物を植えることをメディアを使って啓蒙している状況は、一種の罪悪とも思われないこともない。

虫をつけないための農薬散布は、その植物をもはや生態系の一員ではなくしている。虫がつきそれを鳥やクモが食べ、食物連鎖によって、豊かで多様性に満ちた空間を作ることが、環境を守ることなのであるが、農薬漬けの園芸はそれには当たらない。鳥や虫にとっては、食物にも住居にもならないのであるから、造花と変わらなくなってしまう。

また、生態系にない派手な植物を植えることで、受粉を助ける虫の目を引き、本来あるべき自生の植物の受粉機会を減らすことにもなりかねない。一面のひまわりやチューリップを観光の目玉としているところが、テレビなどで放映されて、多くの人がそこを見に訪れているが、その影で、生態系を形作っている植物達が種をつけることができずにいるのである。

植物の選び方にも問題がある。受粉する虫や鳥など動物と植物は、ともに共進化の賜物である。千葉県舞浜の埋立地のように、外来植物のみを植えたのでは、野鳥や虫の食料にもならず、生態系に寄与しない。

2004年夏に一日舞浜を巡検に行ったのだが、鳥が３種類（カラス、ハト、ヒヨドリ）と虫が３種類（蟻、蚊、甲虫の死骸）のみしか目にしなかった。２、３日後に多摩ニュータウンを歩いた時には、鳥だけでも10種類近く（ドバト、キジバト、カラス、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、ツバメ、カワラヒワ）を１時間くらいの間に見ることができた。多摩ニュータウンでは、再生された雑木林や生態系を残した公園が点在している。その地に昔から自生するものを中心に、生態系を考えた植物を選んで、植えることが大切である。また、同じ種類の花でも八重のものは蜜が少ないし、種類によっては実がならないものもある。園芸用に改良した品種ではなく原生種に近いものを植えていかなくてはならない。

少しずつ、環境に適した植物を植えようという動きが出てきているが、ただ花を植えたり、土に親しんだりというのでは、環境問題の観点からも、用をなさないのだということに、園芸をする人たちに気付いてほしい。園芸ほど、直接自然に関わることの出来る芸術は無いのであるから、その責任は大きいのである。

6　これからの課題

作り手の立場に立ってみるとき、芸術が環境教育に寄与していくには、まだまだ幾つものハードルがある。園芸でみたように正しい知識も必要であろうし、作品の作り手自体が商業主義に流されない視点や思想を持っていることも必要になる。そして、何よりも、芸術が環境教育に寄与できるものであり、それが大きな力になるのだということに、作り手が気付かなくてはいけない。作品が社会にどのような影響をもたらすのかを考えながら、作品を作って行って欲しいものである。

そして、環境教育の担い手達も、ただデータに基づく科学として環境教育を学習させたり、イベントの一環として教えたりするのではなく、日常の生活の中で、気持ちよく、学習と言うよりは好みや楽しみとして、環境を考えることができる方法を模索するべきである。そして、そのような

考えかたに立つとき、芸術が環境教育に及ぼせる影響力は大きなものとなる。データに基づく理知的なものは、心を高揚させ、心の奥まで感動させることは難しい。

人は感動の動物である。知性だけでなく感情の面からも、環境教育を行わなければ、本当に環境を考えて行動できるようになれない。環境教育を行う人たちが、芸術をその一つの手段として取り入れていって欲しいと考えている。

参考文献・ホームページ

はじめに　『沈黙の春』レイチェル・カーソン著、青木築一訳、新潮社　1974

はじめに　『あなたが世界を変える日』サヴァン・カリスースズキ著、学陽書房　2003

1－2　『AERA Mook　新環境学がわかる。』朝日新聞社　1999

2－1　『買ってはいけない』船瀬俊介（他）著、㈱金曜日　2005再版

2－1　『地球を救うかんたんな50の方法』ジ　アースワーク　グループ著、講談社　1990

2－2　ＰＥＴボトルリサイクル推進協議会ホームページ
http://wwwpetbpttle-rec.gr.jp

2－2　JT Delight would ペットボトルリサイクル
http://www.jti.co.jp/JTI/edvviron/knowledge/petbottle/index.html

2－2　「ペットボトルリサイクル」再論『PRESIDENT 2003.3.3号第21回』加藤三郎＝文

2－2　『わくわくゴロリのペットボトルでつくろう』ヒダオサム・石崎友紀著、ＮＨＫ2004

2－2　『杉原先生の理科教室』遊々ペットボトル教室
http://web.kyouto-inet.or.jp/people/sugicom/kazuo/neta/pet.html

2－3　『地球環境報告２』石裕之著、岩波書店　1998

2－3　『日本の絶滅のおそれのある野生生物(4)レッドデータブック』環境省自然環境局野生生物課自然環境研究センター、2003.3

3－2　中央教育審議会『青少年の奉仕活動・体験活動の推進などについて答申』(2002.7)

3－2　「内申があるから先生にこびを売り、好きでもないボランティアや部活をがんばって入る。学校では本当の自分が見せられない。」(中三女子) 1997.8.1　朝日新聞朝刊

3－2　塾は「内申をあげるために、生徒会役員に立候補しよう」「ボランティアを積極的にやろうなどという情報を子供に流すところも出てきました。」県立高等学校通学区域制度検討委員会意見全教滋賀県職員組合書記長高岡光浩（1994.9.18）

3－3　『トポフィリア』イー・フー・トゥアン著、小野有五・阿部一共訳、せりか書房　1992

3－3　『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』降旗信一著、中央法規2001

4－1　『子供の初航海』寺本潔・大西宏治著、古今書院　2004

4－1　『童話の国イギリス』ピーアー・ミルワールド著、小泉博一訳、中央新書　2001